

表題

本1冊でもコラム1編でも、表題によって読もうかな、と食指が動くものとそうでないものがある。(小生の場合はほとんど自分が好きな作者のものに限るから、あまり参考にはならないが)

たとえば、江藤淳さんの「小沢くん、水沢に帰りたまえ」など(思わず吹き出してしまったが)中を読まなくともある程度の予測がつくし、江藤さんのことだから高尚で精細な考証を積み重ねて書いておられるだろうから、うまい!と思った。小沢が政権の中枢にいる間、政治や外交は少しもよくなっていない。日本国内では強面を通っても外国には通じないし、**Tough negotiator** などとおだてられても、中国での借りてきた猫のような態度など見ているだけで恥ずかしくなってくる。自らの権力基盤は、どこからか湧いてくるお金だろうけど、子分や腰巾着が周囲を取り巻いていても、あまり日本国民全体に有益だったとは言い難い。裏の話や国会内部での話は知らないが。

市川房江さんが、「女にも選挙権を!」と言い続けてきたが、女性に選挙権があたえられても少しも政治はよくなるまい。」と嘆いたが、その下働きをしていた菅があんな体たらくなものなあ。

山本夏彦さんは、コラムの題をつけるのが上手で、自ら「ワタシは題の人である。」と称していたくらいで、ダメの人、平和は戦争にかこまれている、オーイどこ行くの、茶の間の正義などなど。最大のヒットは、「人はどこまで無実か—————悪事が露見するまで」だろう。ある自民党の人に酒の席で大受けしたもの。箸袋に書いてくれと言われた。この一文は、山崎豊子さんの2回目の盗作騒ぎのときのコラム。

最近では優れたコラムニストもほとんどいなくなった、書いている人はたくさんいるけれど。週刊新潮の写真コラムは夏彦さんの代表作のひとつであるが、このところ、藤原正彦さんが書いている。藤原さんは数学者であるが、作家新田次郎さんと藤原ていさん（満洲からの引き揚げの時の苦労をまとめた「流れる星は生きている」の著者）の子である。文才はあるのだろう、以前からいろんなところに書いておられる。代表作は「**国家の品格**」で、一世を風靡した。

（二番煎じで「女性の品格」なんかを臆面もなく書いた女性もいるが、それこそ**品格**が疑われる。みっともないと思わないのだろうか。）

藤原さんの書いたものは論旨が明確で、理解しやすい。最近、夏彦さんの跡を継いで、写真コラムを書いておられるのだが、表題や

文章に苦勞のあとが偲ばれる。先日の「**夢みる乙女**」は秀逸だった。民主党政権の無能ぶりを描いたものだが、表題だけで笑ってしまった。まったく仰せのとおりだからである。

高島俊男さんは、「お言葉ですが・・・」でマスメディアに登場したが、もともと中国文学畑の人で、三国志や水滸伝の権威でもある。この人の本に「本が好き、悪口言うのはもっと好き」があって、しまった！ 先を越された、と思った。

政党の名前も「表題」みたいなものであるが、民主党というのは羊頭狗肉ではないか。むしろなんでもありの「自由党」（水泳の自由型のつもり）の方がピッタリするのではないか。アッという間に人気急落し（無論すべては自ら招いたことなのだが）、衆参両院での圧倒的多数を目論んでいたのだがねじれ国会になってしまい、あろうことか見切りをつけられた社会党と提携しようなどという愚かな選択をする。**貧すりゃ鈍する**と表現します。

2010.12.08.